

平成30年度・令和元年度 文部科学省委託

教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学び

(アクティブ・ラーニング)の視点からの学習・指導方法の改善の推進

県事業名

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善充実事業

2年間の研究の取組

(研究課題)

拠点校が研究の重点とする教科等において、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせた「深い学び」の実現に向かうよう、授業改善に取り組むこと。



大館市立城南小学校



大仙市立大曲小学校



大仙市立大曲中学校

本事業では、大館市立城南小学校、大仙市立大曲小学校、大仙市立大曲中学校を拠点校、県立大曲高等学校を協力校とし、学習活動の表面的な様相にとらわれることなく、児童生徒の学びの深まりにつながる質の高い学習活動を展開することを目指して、研究を進めました。

研究主題

主体的・対話的に学ぶ子どもの育成
～ 協働で学びを深める「シンカタイム」と
自己を見つめ次の学びにつなげる「振り返り」～

大館市立城南小学校

1 本研究に係る自校の現状と課題

- ・本校では平成23年度～26年度の4年間、「学び合いを通して確かに学ぶ城南スタイルの定着」というテーマの下、算数科の研究に取り組んできた。昨年度からは、「主体的・対話的に学ぶ子どもの育成」というテーマに基づいて、「子どもと共につくる単元計画」「考えを広げ、深めるシンカタイム（学び合い）」「自己を見つめ、学びをつなげる振り返り」の三つの取組について、国語科と算数科を中心に研究を進めてきた。昨年度の本校児童アンケートや秋田県学習状況調査の学習の意欲等に関するアンケートでは、学習を通して自分の成長を感じていると捉えている児童は90%を超えている。このことから、話合いや振り返りのある授業が定着し、児童が意欲的に学習していると捉えることができる。
- ・「深い学び」の視点で見ると、達成については十分とは言えない。全校が足並みをそろえて学習する手立てを工夫しながら、教師が「ねらいに迫るための『シンカタイムの視点』の準備」「シンカタイムでの効果的な介入」「児童の考えの効率的な見取り（振り返りの見取りも含む）」などを探求することで、深い学びに導くことができるのではないかと考える。



＜シンカタイムの視点に基づく意見交換＞

2 具体的な取組

(1) 主体的な学びに導く単元計画

- ① 教師は、各教科の内容の系統性を把握し、身に付けさせたい資質・能力を明確にした単元を構想する。
- ② 国語科では、児童の初発の感想を基に、どのように見方・考え方を働かせたら資質・能力が身に付くかを考えて、児童と共に学習計画を立てる。

(2) 考えを広げ、深めるシンカタイム

なるべく教師に頼らず、児童がより主体的に課題解決に向かう学び合いの時間を「シンカタイム」と名付け、授業の中に取り入れて、次のように実践してきた。

- ① 児童が追究したくなる学習課題を設定する。
- ② 視点を明確にした話合いを行う。学びを深めるための「シンカタイムの視点」を示して発問することで、ねらいに迫る。

「シンカタイム」のポイント

- 「シンカタイム」のカードを黒板に掲示し、児童主体の学び合いの時間であることを意識させる。
- 継続してきた学び合いを土台に、児童同士で発言をつないでいく。
- 全員がしっかり参加する。聞き手も反応することで参加する。
- 友達の考えと比較して学びを深めていく。
- ねらいを達成し、学びが深まるように「シンカタイムの視点」を準備し、ゆさぶりの発問をする。
- 高学年になるほど教師の介入を少なくする。
- 単元のどの時間に「シンカタイム」を設定するのが効果的かを考えて計画する。

- ③ シンカタイムの全ての時間を児童任せにせず、学び合いのねらいからずれてしまいそうなときやねらいに迫るための大切な場面で、教師が、「児童の意見の掘り下げたいところに着目させる」「既習の内容等を想起させる」「見取りを生かして意図的指名を行う」「新たな視点を示す」などの介入をすることで、深い学びに導く。
- ④ シンカタイムの中で、どの意見をどのようなときに取り入れるか考えながら見取りを行うことで、児童の学びの深まりに違いが見られる。学習計画を立てる段階において、授業の中で児童の考えを見取るのか、家庭学習等で事前にもたせた考えを見取るのかを計画し、授業の流れに生かす。
- ⑤ 課題設定→見通し→自力解決→シンカタイムという流れで行う。

(3) 自己を見つめ、学びをつなげる振り返り

- ① 振り返りの視点を掲示する。
- ② 児童が振り返りを行うことで、授業の中での自己の変容や成長に気づき、自信へとつながっていくように、授業の中で共有したり、教師が適切に価値付けたりする。
- ③ 児童の振り返りを支援するために、1時間の思考過程が分かる板書をしたり、学習コーナーに単元の学びが見える掲示をしたりする。

(4) 全校が足並みをそろえて学習するための手立て

- ① 学び方のオリエンテーションを実施
シンカタイムについて、教師も児童も共通理解するために、教育専門監によるオリエンテーションを実施する。
- ② 1時間の授業の流れの共通理解
1時間の授業展開は、基本的に全校で統一するようにしている。課題設定、見通し、自力解決、学び合い（シンカタイム）、まとめ、確認問題（算数）、振り返りを45分間で行うためにタイマーを活用するなどして、教師も児童も時間を意識して学習するようにしている。
- ③ 他学年の授業を児童も教師も参観
下学年の児童が上学年の児童の授業を教師と共に参観し、授業のイメージをもてるようにする。どのような話し方をしたらよいか、どのような態度で授業に臨んだらよいか、将来どのような姿になればよいかを、児童も教師も確認することで、未来の自分の姿をイメージすることができる。

④ 教師の授業スキルの向上

月ごとに重点めあて（三つの取組から一つ）を決めて、全校体制で取り組んでいる。また、月に1単元を重点単元に決め、その月の重点めあてに沿って学習計画カードを作成し、授業に臨んでいる。

3 研究の成果

(1) 児童の変容

昨年に引き続き、今年度も「主体的・対話的に学ぶ子どもの育成」を目指し、「子どもと共に作る単元計画」「シンカタイム」「振り返り」の三つの柱に絞って研究を進めてきたことで、目標が明確となり、児童の変容にも表れてきている。アンケートでは、学習計画・シンカタイム・振り返りについて、自分の成長を感じることが

学びの振り返り

☆レベル5 新たな疑問

- ・〇〇の時はどうなるのだろう

☆レベル4 学びのつながり

- ・こんなことにも〇〇が使える
- ・この学習は生活の中の〇〇に生かせる
- ・〇〇の学習とつながっている

☆レベル3 自分の変化・成長

- ・～の考えが変わった
- ・～する力が付いた

☆レベル2 解決のしかた

- ・〇〇を使った発言を聞いて～
- ・～と同じ方法で～
- ・〇〇を使って説明したら～

☆レベル1 分かったこと

- ・～が分かった
- ・～を知ることができた
- ・～と納得できた



<学び方のオリエンテーション>

「よくある」「ときどきある」と答えた児童は、90%以上だった。また、授業で進んで発表したり、反応したりしているかについて、「大変良い」「良い」「だいたい良い」と答えた児童は、約90%だった。これらのことなどから、児童が主体的・対話的に授業に臨んでいると考えることができる。

(2) 三つの取組から（児童の姿より）

① 主体的な学びに導く単元計画

- ・学習計画から課題を導き出したり、見通しをもって学習に臨んだりできるようになってきている。（導入の時間が短くなり、学び合いの時間が多くなる。）

② 考えを広げ、学びを深めるシンカタイム

- ・課題に対して、じっくりと考え、自分の言葉で話そうとする児童、話し合うことを喜んだり楽しんだりする児童、一つのことをいろいろな角度やいろいろな視点から見て考えようとする児童が増えた。

③ 自己を見つめ、学びをつなげる振り返り

- ・振り返りを積み重ねていくことで、自己の変容に気付き、学習への自信をもてるようになった。
- ・授業の中で振り返りを共有し、それに対して教師が適切な価値付けを行うことで、児童の振り返りの質が向上した。

4 研究のまとめと今後の取組

(1) 研究のまとめ

シンカタイム、振り返りの実践は、授業改善という面からも、教師や児童の意識改革という面からも一定の成果が見られた。しかし、「深い学び」の実現については十分とは言えない。

(2) 今後の取組

「深い学び」へ導くために、「課題→『シンカタイムの視点』の内容→まとめ」の整合を図る。また、各教科等の「見方・考え方」を働かせる授業実践を積み重ねながら、授業を組み立てる教師のコーディネート力の向上を図っていく。



<授業研究会の様子>

5 2年間の研究の取組を振り返って

2年間の取組で、教師や児童の授業へ取り組む姿や意識が大きく変化した。この取組に対する、「よさを実感できた」「手応えがあった」という言葉に、教師一人一人の授業改善への第一歩を感じることができた。

【児童アンケートの自由記述より】

- ・シンカタイムに参加するために、自分の意見をもとうという前向きな気持ちになる。
- ・みんなの温かい反応、「失敗しても大丈夫」という励ましの声があったから、自信がついて今の自分がいると思っている。
- ・自分の授業に向かう姿勢や友達の見方を振り返ることで、次にがんばりたいことを見つけられた。次につながるシンカがすごく大切だと感じた。

【教師アンケートの自由記述より】

- ・常にシンカタイムでの学び合いを意識して、授業構成を考えるようになった。
- ・シンカタイムで「これだ!」という視点に導くと、児童の思考や発言が真剣なものになると実感できた。
- ・児童の発言を計画的に生かしたり、前時の振り返りを学習の導入で使ったりすることは授業実践になくってはならないものになった。

1 本研究に係る自校の現状と課題

- ・「秋田の探究型授業」の基本プロセスをベースにして、「既得の知識と他者の知識・思考（言葉）をつなげる学び合い」や「自己の変容の自覚のための振り返り」の実践により、児童が考えを広げ深める指導について、実践と研究を重ねている。
- ・昨年度の「聴くこと・話すこと」の共通実践により、本校児童は知識や言葉をつなぐ学び合いができるようになってきた。また、視点を明確にした振り返りが自己の変容の自覚につながり、次の学習や生活に生かされてきた。
- ・昨年度の取組を踏まえ、今年度は、「学校の教育目標」「目指す子ども像」の具現化に向け、育成を目指す資質・能力を発達の段階に応じて明確にするとともに、「単元や授業の中で児童に働かせたい『見方・考え方』」と「単元で付けたい資質・能力を身に付けた児童の姿」を明らかにして、授業改善に取り組む必要がある。

2 具体的な取組

(1) 児童に働かせたい主な「見方・考え方」を明確にした単元構成・授業展開

① 育成を目指す資質・能力に関連付けたカリキュラム・デザインの作成

本校の教育目標の実現（育成を目指す資質・能力の獲得）に向けて、生活科と総合的な学習の時間を中心に据え、各教科で育成を目指す資質・能力と関連付けたカリキュラム・デザインを作成した。このことにより、教育課程における単元の位置付けや単元で育成を目指す資質・能力を確認し、「見方・考え方」や育成された資質・能力を単元の中でどのように活用させるのかを明らかにして、単元や授業を構想することができるようにした。

② 全教職員による「見方・考え方」の確認と共通理解

新学習指導要領解説に示されている各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を基に、児童のどのような状況が「見方・考え方」を働かせている姿なのかを教科部で検討し、全教職員で共通理解を図るために一覧表にまとめた。また、単元や授業を構想するときには、その一覧表を活用して、単元や授業のどの場面で児童がどのような「見方・考え方」を働かせると、目指す児童の姿に向かうことができるのかを考え、それを指導案に記載した。こうすることで、「見方・考え方」を働かせるための教師の手立てを明らかにして、実践につなげられるようにした。

大仙市立大曲小学校 第3学年桃組 国語科学習指導案	
場 所：大仙市立大曲小学校3年桃組教室 指導者：教諭	
1 単元名	感想文で伝えよう ちいちゃんの思いとわたしの考え ～場面の移り変わりと結びつけて、登場人物の気持ちを想像する～ 教材「ちいちゃんのかげおくり」（光村図書）
2 児童に働かせたい主な「見方・考え方」と目指す児童の姿	場面と場面を関係付け、登場人物の様子や気持ちを叙述を手掛かりにして考えること。
登場人物の気持ちの変化や性格、情景などについて、場面と結びつけて具体的に想像して読んでいる児童。 具体的には、会話や様子を表す叙述に着目し、登場人物がおかれた境遇や状況、気持ちの変化を考えるという「見方・考え方」を働かせ、二つの場面の「かげおくり」を比較することを通して、ちいちゃんの願いや思いを捉えたり自分の考えをもったりする姿。	



<児童に働かせたい主な「見方・考え方」と目指す児童の姿の記載>

<国語の授業（グループ学習）>

(2) 「学び合い」と「振り返り」の実践

① 「見方・考え方」を働かせるための「問い」の重視

学び合いにおいて、児童が「見方・考え方」を働かせて、深い学びを実現する鍵になるのが「問い」であると考えた。授業前段では「何に目をつけて考えるか」を児童に問うことで、学習課題と既得の知識を関連させて、解決の見通しがもてるようにした。ペアやグループでの話し合いでは、児童が「見方・考え方」を働かせることができるように、教師と児童に「話し合いの約束」を示して取り組んだ。学級全体で学び合う場面では、教師が児童の考えや発言を見取った上で「問い掛け」や「根拠を問うこと」で、児童の中にある既得の知識から解決の糸口を引き出せるようにした。また、児童が働かせている「見方・考え方」を教師が価値付けることで自覚できるようにした。



<6年生算数の授業（学級全体での比較・検討）>

【教師版】

話し合いの約束（ペア・グループ）

- ・児童が何のために何を話せばいいのかを理解している
- ・児童が自分の考えをもって参加している
- ・児童が自分の考えと友達の考えを比較・検討できている
- ・話し合いのゴールが明確になっている

<教師間で共通理解した「話し合いの約束」>

② 自己の変容を自覚するための「振り返り」の実践

「振り返り」は、児童がノートに書くことを基本とし、発達の段階に応じて五つの視点を明確化し、各教室に掲示して共通実践した。学習のねらいによって、教師が視点を決めることもあれば児童に選択させることもあった。「振り返り」により、児童自身が自己の変容を捉えることを大事にし、学んだことや学び方を自覚させ、生活や学習で役立てたいという意欲の向上を目指した。

(3) 児童の姿に基づいた共同研究体制の構築

研究推進では、各教科等の「見方・考え方」を中心にした“教科部”と、児童の発達の段階を中心にした“学年部”の教師を合わせたチームで指導案検討会や模擬授業を行うなどしながら、授業改善に取り組んだ。また、研究協議会で教師が授業を参観する際には、児童が発した『光る言葉』（児童が「見方・考え方」を働かせている言動や授業の中で目指す子どもの姿に向かっている言動）を付箋に書き出し、それを基にしてワークショップでの協議を行った。

3 研究の成果

(1) 児童に働かせたい主な「見方・考え方」を明確にした単元構成・授業展開

学校評価教職員アンケートから

* 3段階評価での教職員の平均（7月との比較）

質問事項	令和元年7月	令和元年12月
1 思考の再構築や自己の変容を目標に、視点を明確にした振り返りを取り入れているか。	2.02	2.36 (+0.34)
2 「比べて聴く・つなげて話す」「理由をつけて話す」など学びのスタイルを実践につなげているか。	1.95	2.08 (+0.13)
3 各教科等の「見方・考え方」を働かせることを意識して、授業に取り組んでいるか。	1.76	2.30 (+0.54)

本校の共通実践に関わる項目について、教職員の自己評価が上昇している。特に「見方・考え方」を働かせることについての教職員の意識の高まりが見られる。

(2) 「学び合い」と「振り返り」の実践

秋田県学習状況調査から *「当てはまる」と答えた4～6年生児童の割合（県平均との比較）

質問事項	平成30年12月	令和元年12月
ふだんの授業では、授業の目標（ねらい・めあて）を立てて取り組んでいると思う。	71.9 (+1.5)	75.6 (+7.2)
ふだんの授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思う。	59.9 (-3.6)	68.6 (+5.0)
ふだんの授業では、自分の学習活動を振り返る活動を行っていると思う。	62.5 (+1.4)	66.7 (+6.5)

平成30年度の結果と比較して「当てはまる」と答えた児童の割合が増えている。また、県平均を上回っており、良好な状態であると捉えることができる。

(3) 児童の姿に基づいた共同研究体制の構築

児童の『光る言葉』を話題にした研究協議など、児童の姿を基にした共同研究の成果が、(1)と(2)のアンケート結果のように、教師や児童の意識の変容を示す数値となって表れてきた。

4 研究のまとめと今後の取組

(1) 研究のまとめ

- ・全教職員による「見方・考え方」の確認と共通理解、育成を目指す資質・能力を関連付けたカリキュラム・デザインの作成により、児童が「見方・考え方」を働かせて、「目指す子どもの姿」に近づくことができてきた。
- ・児童に働かせたい主な「見方・考え方」と目指す児童の姿を明確にすることで教師の手立てが具体的になり、昨年度から取り組んできた、知識や言葉をつなぐ学び合いと自己の変容の自覚のための振り返りの充実につながった。

(2) 今後の取組

- ・「見方・考え方」を明確にした単元構成・授業展開の充実のために「カリキュラム・マネジメント」の改善を進める。また、「見方・考え方」に基づく授業改善について、重点教科部での取組から教師一人一人の教科指導の取組へ広げる。
- ・「学び合い」では知識と知識がつながる学び合いの構築を進める。「振り返り」では学習内容の振り返りとともにメタ認知につながる振り返りの充実を図る。

5 2年間の研究の取組を振り返って

「『見方・考え方』を明確にした単元構成・授業展開」「知識・言葉をつなぐ学び合い」「自己の変容の自覚のための振り返り」の取組の成果が、次のアンケートの記述のように、考えを広げ深め合う児童の姿として表れてきた。今後も、見取った児童の姿からの授業改善を大切にして、研究と実践を重ねていきたい。

【学びに関する児童アンケートの記述より】

- ・友達の発表を聴いて、自分の考えと違うと「そういう考えもあるのか」と考えをふくらませることができた。（4年生）
- ・振り返りを書くことで「次はこうしたい」という具体的な課題を見つけることができた。（5年生）
- ・友達の考えと比べることで自分の考えがはっきりして、つなげて話す、比べて聴くのを繰り返して、考えを広げたり深めたりすることができた。（6年生）
- ・振り返りをすると、分かることと分からないことがはっきりした。また、学習した考えを次の学習で役立てることができた。（6年生）

1 本研究に係る自校の現状と課題

- ・生徒の疑問や気付きを生かしながら学習課題を提示するなど、生徒が見通しをもって取り組む「主体的な学び」の視点と、グループでの話し合いを効果的に機能させた「対話的な学び」の視点からの授業改善について、多様な手立てを工夫しながら取り組んできた。生徒の学ぶ姿からは一定の成果が見られ、それが諸調査の結果にも表れている。
- ・話し合い活動において生徒の考えを広げたり深めたりすることについては、更なる手立ての工夫が必要である。このことは、全国学力・学習状況調査の生徒質問紙調査の結果からも明らかになっている。
- ・生徒が既得の知識や技能を活用して考えたり、学びによる変容を自覚したりする「深い学び」の視点からの授業改善については、具体的な指導が実践されておらず、研究をより一層深める必要がある。

2 具体的な取組

(1) 「秋田の探究型授業」の基本プロセスを機能させた授業づくり

単元や題材など内容や時間のまとまりを見通し、「学習の見通しをもつ」「自分の考えをもつ」「集団（ペアやグループ、学級）で話し合う」「学習の内容や方法を振り返る」の基本プロセスを機能させた「秋田の探究型授業」を展開する。特に「集団（ペアやグループ、学級）で話し合う」活動では、学習場面におけるねらいと期待される効果に応じて「ペア」「グループ」「自由交流」などを使い分ける。また、他の生徒から学んだことを基に考える場面において、「更に追究したいことは何か」「新しく発見したことは何か」などの新たな課題に気付かせるような発問をする。

(2) 「思考の活性化」を促し、「深い理解」を実現する単元（題材）づくり

新学習指導要領では、知識の理解の質を高めることが重視されている。そこで各教科等の共通実践事項として、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、「深い理解」の実現を目指す授業づくりを行う。特に単元（題材）づくりに当たっては、次の二つの視点を取り入れる。

- ・各教科等の特質に応じた学習を通して習得する「知識及び技能」の明確化
- ・知識を他の学習や生活の場面で活用する学習場面の設定

(3) 各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせた生徒の姿の分析

本校の研究のキーワードに「思考の活性化」がある。生徒が主体的で対話的な活動をしていることをActive（能動）な状態と考え、授業において生徒がPassive（受動）の状態からActiveの状態になることを思考の活性化と捉えている。生徒がActiveな状態であり、かつ各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせている場面ではDeep（深い学び）の状態が多く見られると仮定し、生徒の学ぶ姿の分析結果を生かして授業改善を進めるために、次の二つのことに取り組む。

- ・各教科等ごとに研究授業において、Passive、Active、Deepの状態を生徒の具体的な姿で表した「PADカード」を作成する。1時間の授業の中で、3～6名の抽出生徒について、複数の教員が「PADカード」を基に観察した内容か

ら授業分析を行う。また、授業後にそれぞれの生徒に対してインタビューを実施し、授業前後の生徒の学びの変容を明らかにする。授業研究会では、この結果を基に協議し、改善点について教科等の枠を超えて全員で共有化を図る。

- ・「PADカード」と「振り返りカード（マイヒストリー）」を整合させながら、生徒一人一人の「見方・考え方」を引き出し、授業を通して働かせ、「見方・考え方」が更新されたり、補強されたりしているかを「振り返りカード（マイヒストリー）」の記述から分析する。

3 研究の成果

(1) 令和元年度秋田県学習状況調査の生徒質問紙から

以下の質問項目に「当てはまる」と答えた生徒の割合（県平均との比較）

質問項目	1年生	2年生
ふだんの授業では、自分の学習活動を振り返る活動を行っていると思う。	71.3 (+12.2)	81.1 (+22.7)
ふだんの授業では、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う。	66.2 (+6.1)	79.0 (+19.5)

いずれの質問項目においても、県平均を大きく上回る結果となっている。特に2年生においては、2年間の継続実践の効果を調査結果から見取ることができた。

(2) 育成を目指す資質・能力を明確にした単元（題材）づくりの工夫と充実

新学習指導要領に対応した3観点に基づき「単元（題材）の目標と指導計画及び評価の計画」を作成した。また、学習指導案には、生徒に働かせたい主な「見方・考え方」と目指す生徒の姿を具体的に示した。このことにより、単元（題材）を通して、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、問題を見いだして解決策を考えたりするなど各教科等の特質に応じた学習過程の工夫が図られた。

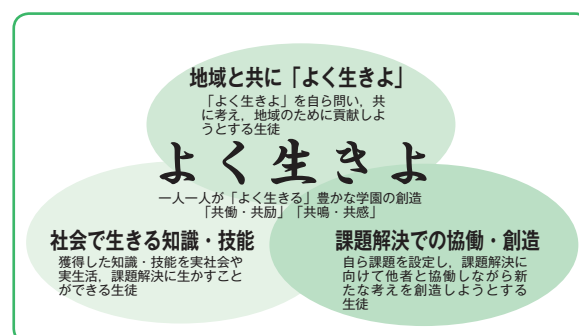
(3) 「PADカード」と「振り返りカード（マイヒストリー）」の活用による授業改善の充実

12月に実施した教師の振り返りでは、「PADカードを作成することで、目指す生徒の姿がより明確になった」「効果的な手立てを自身の授業にも生かすことができた」「他教科であっても視点を明確にして授業参観することができた」等の記述が多数あり、この取組が授業改善に効果的であったと考えられる。また、「振り返りカード（マイヒストリー）」には、「『見方・考え方』に関わる項目をチェックすること」「自身の変容を記述すること」の2項目による振り返りを全教科共通して取り入れた。特に、「見方・考え方」に関わる内容を記載したことにより、働かせたい「見方・考え方」を教師と生徒が共通理解し、単元（題材）の学習を進めることができた。

4 研究のまとめと今後の取組

全体に係る成果として、「カリキュラム・マネジメントによる三つの資質・能力の観点での『目指す生徒の姿』の設定」「大曲中学校としての授業改善サイクルの確立」が挙げられる。

特に、「大曲中学校としての『見方・考え方』の捉え」「振り返りカード（マ



イヒストリー)」「PADカード」からなる授業改善サイクルによって、p 7の『具体的な取組』に示したことを大きな一つのまとまりとして捉えられるようになった。このことにより、各取組を相互に関連付けて研究を進めることができた。

今後の取組の展望としては以下のことが挙げられる。

(1) 「ペア」「グループ」「自由交流」等の更なる充実

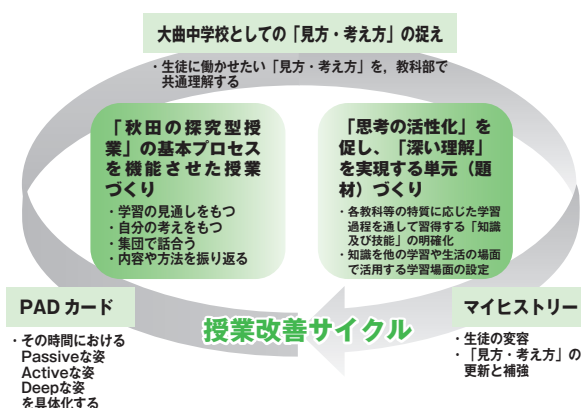
2年間の研究によってその有用性が実証されたこれらの活動を、今後も検証を重ねながら、日々の授業の中で効果的に活用していきたい。

(2) カリキュラム・マネジメントによる単元（題材）づくりの工夫と充実

音楽科教師が「鑑賞」の単元構想をする際、国語科教師に「批評」の単元で生徒がどのような学びをしてきたかを細かく質問する姿などが見られた。こうした教科等横断的な視点での取組が更に進められるよう、カリキュラム・マネジメントの充実を図る。

(3) 携帯版「PADカード」の作成と「振り返りカード（マイヒストリー）」の更なる改善と活用

研究授業での活用は継続しつつ、研究授業用の「PADカード」を日々の授業に汎用できる「携帯版」として教科ごとに作成し、日常的な使用につなげたい。また、「振り返りカード（マイヒストリー）」を「振り返りの記述内容の質を高める」「教師と生徒との双方向性の強化」「『主体的に学習に取り組む態度』等の評価との関連付けを模索」という視点で更に改善し活用していく。



5 2年間の研究の取組を振り返って

「カリキュラム・マネジメントによる三つの資質・能力の観点での『目指す生徒の姿』の共通理解」「大曲中学校としての授業改善サイクルの確立」を両輪として研究を推進してきた。初年度に課題とされていた「『深い学び』の視点からの授業改善」についても、達成状況を生徒の姿で捉えるための視点・方法として、「見方・考え方の捉え」「PADカード」「振り返りカード（マイヒストリー）」が機能したことにより、改善に向かっている。生徒の変容や教師の取組における感想は、以下のとおりである。

【教師の振り返り】

- ・「見方・考え方」について共通理解することで、単元（題材）や授業づくりに見通しをもてるようになった。
- ・生徒が記述した「振り返りカード（マイヒストリー）」の内容を継続して見ることで、単元を通しての変容や深まりが見られる。
- ・PADカードを活用して授業参観をすることにより、発問の工夫や学習活動の精選につながった。生徒の実態に応じた授業改善に生きるツールだと思う。

【生徒の振り返り】

- ・振り返りを継続することで、「～の場合はどうなるのだろう」と考えるようになった。また、習ったことを使って何かできないか考えるようになった。
- ・他の意見を聞き、感じたことを「振り返りカード（マイヒストリー）」に記録することで自分の考えが更に深まった。

本事業の成果及び今後の展望

本事業では、大学教授、市教育委員会指導主事、拠点校・協力校の研究主任等を委員とする実践協議会を組織し、各学校の取組の充実に向けて、研究の方向性や成果及び課題について協議しながら、2年間の研究を進めた。主な成果については、次のとおりである。

1 成果

- ・児童と共に単元計画を立てたり、各教科等で育成を目指す資質・能力を関連付けたカリキュラム・デザインを作成したりしたことは、全教職員で各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を共通理解することや育成された資質・能力を単元の中でどのように活用させるのかを明らかにすることにつながった。
- ・学び合いの場面において、児童生徒の発達の段階に応じて教師の介入を工夫したり、既得の知識と他者の知識や思考をつなげて話し合わせたりしたことは、学習内容の理解を質的に高めることや児童生徒が自分の考えを再構築する上で効果的であった。
- ・振り返りの場面において、発達の段階に応じた振り返りの視点を示したり、振り返りカードに「見方・考え方」に関わる項目を入れたりしたことは、児童生徒が本時の学びをこれまでの学びと関連付けたり、自身の変容を自覚できたりすることにつながり、本時の学びを次の学びにつなげる上で効果的であった。
- ・拠点校において、具体的な授業改善の手立てを協議し、その成果を次時以降の児童生徒の姿に還元しようとする取組や、「深い学び」へ向かう生徒の姿について具体的に示したものを視点とした見取りなどは、授業研究会の内容や方法を工夫することにつながり、全教職員による共同研究を機能させる上で効果的であった。
- ・拠点校の小・中学校が連携して指導案検討会・事前授業・研究授業・授業研究協議会に取り組みなど、教科や校種を超えて授業を見合ったことで、児童生徒の姿からの授業づくりについて協議を行うことができ、拠点校の取組の充実につながった。
- ・拠点校及び協力校が各教科等における「見方・考え方」を明らかにして学習指導案等に示すなど、共通の視点を取り入れながら互いの授業を参観したり、授業研究会に参加したりしたことは、小・中学校と高等学校が授業改善に連携して取り組む上で効果的であった。
- ・県教育委員会が主催する学力向上フォーラムで授業を公開するなど、研究の取組を広く発信することや、公開後のアンケートを通して県内外の多くの参加者から感想や評価を得るなど、情報発信したことで得られた客観的なデータや声を生かすことは、拠点校及び協力校の取組の活性化につながった。

2 今後の展望

- ・拠点校及び協力校における研究推進の成果について、県教育委員会の各種事業や学校訪問指導等の機会を利用するなどして普及を図り、県内各学校の成果にもつなげるように努める。
- ・拠点校及び協力校だけでなく、他地区での研究の参考にもなるように、本リーフレット及び参考資料などを県公式Webサイトを活用して発信する。



昨年度の本事業の取組をまとめた「研究の取組（中間まとめ）」及び本リーフレットに関連した「各拠点校の取組に関わる参考資料」は、次のWebサイト又はQRコードからダウンロードできます。本リーフレットと併せて活用してください。

※「美の国あきたネット」の義務教育課のURL
(<https://www.pref.akita.lg.jp/gimukyo/>)



令和元年度 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善充実事業 実践協議会 委員一覧

佐藤 学	秋田大学教育文化学部教授	藤原 孝一	義務教育課副主任
成田 雅樹	秋田大学教育文化学部教授	小西 力覚	義務教育課主任指導主事
石川 政昭	義務教育課長	田中 木真	北教育事務所主任指導主事
大越 章弘	大館市教育委員会指導主事	佐々木 真子	南教育事務所主任指導主事
阿部 光教	大仙市教育委員会指導主事	田山 律子	北教育事務所指導主事
三澤 章子	大館市立城南小学校教諭	小田 長早	南教育事務所仙北出張所指導主事
田村 佳久	大仙市立大曲小学校教諭	柏谷 浩樹	高校教育課指導主事
中山 憲太郎	大仙市立大曲中学校教諭	長門 亮	義務教育課指導主事
伊藤 真	県立大曲高等学校教頭	真崎 敦史	義務教育課指導主事
櫻庭 直美	義務教育課副主任兼学力向上推進班長	望月 直哉	義務教育課指導主事

※敬称略 職名は令和2年3月現在